

8. 「生命について」……私の授業プラン

田中裕巳

生徒たちに「生命について」より深く考えさせるための動機づけとして、生徒たちの目を開かせるような授業をしたい。高校3年生の彼らが、小学校以来の学校教育の中で、そして家庭やマス・コミを通して、何度も聞かされて来たであろう“生命の尊厳”という言葉、単なる知識としてではなく、自分の生き方の中核として位置づけなおすことが出来るような授業をしたい。「生命について」学び考えて来た様々な知識を“生命の尊厳”という中核に支えられた、生きた知識に作りかえるような授業をしたい。そういう思いで、自分の担当予定の授業のうちのいくつかの骨格を考えてみたい。

A. 神話・創世紀にみる生命の誕生

これは、前時の生命科学の立場からの「生命の誕生」と対になるはずの授業である。科学一般が神の摂理から解放されて、人間の理性によって自然界の必然性を解明して来たとするれば、生命科学もまた、生命誕生を自然界の必然性として説明する立場が正統であろう。「自然界の必然性」を人間の理性によって解明しようとする科学は限りなく発展するであろう。

これに対して、「生命の誕生」という人間にとって不可解、不可視な出来事を、神の摂理という必然性によって了解して来たのが神話や創世紀の世界ではないだろうか。科学と神という一見矛盾する2つの必然性を対比させて考えてみたい。

(1) 宇宙・生命の始源についての人間の想像、解釈
神話・創世紀の世界は、宇宙や生命の始まり、由来についての人間の想像や解釈である。

「古代のギリシア人は宇宙の始源に関して色々な想像をした。それは半ば形而上学的なものであって、神がこの世界を創造したとは彼らは考えなかった。神々も亦後になって生れ出たのであり、ゼウスを主神とするオリュポスの神族は実に三代目なのである。ヘーシオドスの『神統紀』によれば、最初に無限の空間カオスが、次にすべてのものの基となる広い胸の大地と愛が生れた。カオスより闇——これは普通地下の冥府に至る暗黒と言う——と夜とエレボスからアイテール——空の上方の部分を目指す昼が生

れた。(略)」(高津春繁『ギリシア神話』岩波新書 P24)

「創世記の冒頭の句は誰でも知っている。『はじめに神が天と地を造った。地は形なく、空虚であった。暗黒が深淵のうえにあり、神のいぶきが水のうえをただよっていた』。

ついで第二章七節では、アダムの誕生がこう語られている。『そこで、神は、土の塵で人を造り、その鼻にいのちのいきを吹きこんだ。すると、この人は生けるたましいとなった』。土(アダマ)がそのまま最初の人の名(アダム)となった。」(松浪信三郎『死の思索』岩波新書 P85)

これらを資料として配り、人間の理性によって世界を解釈する(哲学・科学)以前の非科学的想像をとらえる。

(2) 「創造主」、「超越者」としての神

世界を創造し、人間を創造したのものとして「神」を創造するのは宗教の立場である。非科学的領域(奇蹟や神秘)を信じるのは宗教である。しかしながら、この世界に、人間の理性によってはとらえ難い領域、あるいは科学がふみこむべきでない領域、もう少し控え目にいえば、科学(者)が畏敬すべき領域を認めることは、宗教の立場であろうか。たしかに、たとえば生態系という概念は、「神の摂理」などとは無関係なものとして生物学的に規定しうる概念かもしれない。また逆に、アニミズムという概念は、科学以前の靈魂を信ずる“幼稚”な信仰として捨てるのが科学的かも知れない。しかしながら、生態系の重視にしても、アニミズム的思考の重要性にしても、人間の理性、科学の傲慢を戒めるものではないだろうか。地球や宇宙的規模での環境破壊に対して、生態系の重視やアニミズム的思考の持つ有効性を考えさせたい。「創造主」としての神が「豊穰・恵みをもたらす神」にも、「災厄・不幸をもたらす神」にもなりうることを意味をとらえたい。

(3) 時間・系譜としての神話

始源はカオスであり、それにヌース(理性・秩序)をもたらすものとしての神。キリスト教の終末(カタストロフィー)観と仏教やバラモン教の輪廻思想——無限の時間とを対比させたい。

(4) 文化としての神話

イザナギ・イザナミの神婚について、「これら類話は、東南アジアに広く分布する兄妹始祖洪水神話の一変種のいわゆる原初洪水型に入り、主としてインドネシアに分布している。日本へは、どんな経路で入ったものか明らかでないが、沖縄のアマミキョ・シネリキョを主人公とする創造神話もこの形式であり、かつては中国東南海岸あたりにも分布していて、そこから入ったものかも知れない」とされている(大林太良『神話の話』, 講談社学術文庫, P167)。他に、海幸・山幸など生徒が良く知っていると思われる神話を中心として資料を配り、日本神話の生命観をとらえるとともに、類似性と独自性を考えたい。

(5) 誕生儀礼・葬送儀礼

誕生と死についての宗教的儀礼は、それぞれの宗教の現世観・来世観を反映している。それは神と人間との交わりであり、神の国から人の国へ、人の国から神の国への変身である。そういう意味で、一人の人間の誕生から死までの宗教的儀礼、民俗的慣行を調べさせてみることは、「生命の尊厳」という概念の時間的な重みをとらえることを可能とするであろう。

B. 生命の思想史

「生命の誕生」「身体としての生命」の後をうけて、「生命」というものをどうとらえたらよいか、思想史の中の「生命」観を概観することによって中間的にまとめをしておくという位置にある。

(1) 仏教とキリスト教

森林の思想としての仏教の中にあるアニミズム、多神教的世界と、砂漠の思想としてのキリスト教における生の一回性、受肉という考えを対比させたい。前者は道教の無為自然につながり、生命の温床としての自然観を持ち、後者は利用対象としての自然観がそのまま近代合理主義、近代科学の方法論につながって行くことを考える。

(2) たましいとからだ(靈魂と身体)

ギリシャ語のプシュケーとソーマに対応する英語のソウル(soul)とボディ(body)、 pneuma(霊)とサルクス(肉)に対応するスピリット(spirit)とフレッシュ(flesh)を整理した上で、アナクシメネス

の「われわれのプシュケーが空気であり、これがわれわれを生かしているように、 pneumaが世界全体をとりまわっている」、ソクラテスの「身体からの、靈魂(プシュケー)の分離と解放」が「良く生きること」であること、「新約聖書」の「いのち」としてのプシュケー(マタイ伝第6章「われ汝らに告ぐ。何を食らい、何を飲まんといのちのことを思いわずらい、何を着んとかからだのことを思いわずらうな。いのちは糧にまさり、からだは衣にまさるならずや」)などの意味を考えさせたい。

(3) デカルトの心身二元論

精神と身体は、思考を本質とするものと延長を本質とするものとの峻別されているが、「心は本性上、身体を形づくっている物質の拡がりや次元やその他の特性などに少しも関係せず、ただその器管の総体だけに関係している」として、松果腺に「身体の不可分な全体性が局所化されて捉えられた」(中村雄二郎『共通感覚論』, 岩波現代選書, P175)。

このデカルトの心身二元論は、「近代的自我」(Cogito ergo sum)の確立とともに、「科学的自然観」の確立をもたらしたといわれる。近代合理主義の出発点としての心身二元論をとらえなおすことは、「<身>は自然的存在であると同時に精神的存在であり、自己存在であるとともに社会的存在であるわれわれの具体的なありようを的確に表現している。しかし皮膚の限界を超える身体は、<身>という概念によってもおおいにくせない拡がりをもつようである」という市川浩の身体論(『<身>の構造』, 青土社, P212)にまでたどりつきたい。

(4) 不老・不死への願望

不老・不死の願望は人類の誕生とともに起こった現世への執着である。

手塚治虫の『火の鳥』をとり上げ、不老・不死への願望は、民衆を犠牲にした、執着すべき<いま>をもつ権力者のおごりであることを考える。医学の進歩がもたらした生命維持装置、病院化社会こそ、人間の自然死や尊厳死を蔑視し、生や死をも商品化してしまう資本の論理にからめとられていないかを考える。

この小テーマ全体についての参考資料としては、スミス『生命観の歴史』(岩波書店)、松浪信三郎『死の思索』(岩波新書)をあげたい。